

湖西地方における円形粘土帶土器段階の石器組成

—石器から鉄器への転換の前段階—

李 基 星¹⁾

はじめに

一般的に韓半島で石器から金属器への転換は、青銅器時代中期後半から円形粘土帶土器段階を経て、三角形粘土帶土器段階までの流れの中で行われたと認識されている。その過程で威信材は青銅器に、実用器は鉄器に変化したと言われているが、実際の考古学的様相としては、石器の衰退期と実用器としての鉄器の登場時期に数百年の時間差があり、「過渡期」または「移行期」の転換過程は確認されていない。

それにもかかわらず、稻作農耕を基盤とする大規模な集落を造営した青銅器時代中期の土着文化の豊富な石器文化は円形粘土帶土器段階に入って徐々に衰退し、三角形粘土帶土器段階では鉄器に置き換えられたと認識されている。そして、このような認識には青銅器時代中期から三角形粘土帶土器段階まで同じ文化系統で、同じ生業経済を営んでいたという前提があるようである。しかし、よく知られているように、円形粘土帶土器段階は青銅器時代中期の土着文化とは系統が異なるものであり、そのため、石器から金属器への転換過程を青銅器時代中期の石器組成の変化から見るべきではなく、円形粘土帶土器段階の石器組成からその始まりを見出すべきである。つまり、円形粘土帶土器段階の石器組成を青銅器時代中期の豊富な石器器種と数量からの「衰退」として理解するのではなく、円形粘土帶土器集団が持っている文化的特徴として把握し、その背景を検討しなければならない。

本稿では、このような問題意識に基づき、韓半島の湖西地方の円形粘土帶土器段階の遺跡を集成し、その中から円形粘土帶土器段階単純期の集落遺跡を選び、石器組成の特徴を把握し、その背景について検討する。

I. 石器から金属器への転換過程：認識と問題点

1. 石器から金属器への転換過程についての認識

先史時代の文化発展の中、石器から金属器への転換過程が重要で、画期的なことであったことは明らかである。石器から金属器への変化、大きく見て道具の変化は二つに分けて考えることができる。一つはある器種の登場または消滅、もう一つは同一機能の道具が異なる材質に置き換えられることである（李基星 2011）。そう考えると、韓半島での石器から金属器への転換はどのような場合に当たるのか。

韓半島の場合、金属器への転換は、威信材としての銅剣や銅鏡などの青銅器、実用器としての鉄斧などの鉄器への変化という二つの流れに分けられる。もちろん、琵琶形型銅剣が青銅器時代中期から確認されるが、本格的に多様な器種の青銅器が登場するのは初期鉄器時代であり、この時期の

青銅器は器種ごとに出現時期に差があるものの（李清圭 2011）、細形銅剣や銅鏡、異形銅器などの威信財が中心を占めている。このような変化は、同一機能の道具が異なる素材に置き換わることと、新しい器種が登場することの両方の特徴に該当する。青銅器時代に琵琶形銅剣、磨製石剣などが威信材として墳墓に副葬されることがあるが、剣類を除けば鏡や異形銅器は青銅器時代にはなかった器種である。しかし、威信財の特徴上、同一器種である必要はない。つまり、ある器種が威信財になれる絶対的な基準は機能ではなく、むしろ素材の希少性或いは製作の難しさなどが基準になると思われる。

しかし、鉄器はそれとは違う。青銅器時代中期に入り、稻作農耕が一般的な生業経済方式として定着した後、農耕に関わる道具の構成はほぼ完成し、それからはわずかな機能改善と材質の変化のみが見える。特に鉄器への変化は実用器において顕著であり、それは鉄器の道具としての最大の強みである強度とそれに伴う作業の効率性が最も重要な要因と理解されている。だからこそ、鉄器の登場で農業生産性が大幅に増加し、それに基づく人口増加と社会発展が古代国家の成立につながったと認識されているのである。

このような前提のもと、韓半島の石器から金属器への転換過程は、青銅器時代中期後半から円形粘土帶土器段階を経て、三角形粘土帶土器段階までと理解されている。この過程の中、威信材は石器から青銅器に、実用器は石器から鉄器に置き換えられたと言われている。しかし、まだ石器から鉄器への転換過程は明確ではなく、普段は円形粘土帶土器段階で石器の器種と数量が減少し始め、三角形粘土帶土器段階に鉄器が流入し、各々の器種が代替されたと理解されている。

私たちが一般的に考える道具の変化、特に器種の登場や消滅ではなく、特定の機能を担当している道具において材質の変化は、遺物の形式変化と同様に、既存の材質が徐々に減少し、新しい材質が徐々に増加する「過渡期」または「移行期」の過程を経て、新しい材質が完全に定着する過程である。しかし、石器から鉄器への変化はそうではない。ほとんどの石器器種が遺跡で確認されない時期からそれに対応する鉄器が登場するまでは数百年の時間的空白が存在する。つまり、考古学的な様相は曖昧なまま、石器から鉄器への転換というイメージだけが存在することである。

2. 問題の所在

地域によって様相は異なるが、大規模な集落が造営できるほどの文化的な全盛期を迎えていた青銅器時代中期に、外来系の円形粘土帶土器文化が広がり、三角形粘土帶土器段階に至る過程に石器から鉄器への転換過程を代入し、[青銅器時代中期の豊富な石器の器種と数量] → [円形粘土帶土器段階に石器減少] → [三角形粘土帶土器段階に鉄器に置き換え] という一連の流れで理解しているのが今の認識である。

このような認識には、知らない内に各々の時期が同一文化系統、同一生業経済であったという認識がその前提になっているようである。例えば、松菊里文化→円形粘土帶土器文化→三角形粘土帶土器文化への流れに同じ（稻作農耕農耕の）生業様式を維持していたが、松菊里文化段階の豊富な石器は、円形粘土帶土器段階に入り、次第にその器種と数が減少し、三角形粘土帶土器段階に入り、鉄器に置き換えられたというイメージがあるのである。

しかし、よく知られているように、青銅器時代中期文化から三角形粘土帶土器文化までの流れは連続した文化発展の過程ではない。韓半島内の青銅器時代中期の土着集団が存在していたところに

外来系の円形粘土帶土器集団が入ったものであり、そのため、両集団の関係を葛藤・対立と見たり（金範哲 2001；朴淳發 1997；李亨源 2005）、最近では相互交流の文化的様相を重視する視点（李亨源 2015）などがある。特に、相互交流の文化的様相を重視する研究は、住居の属性を基準に粘土帶土器出土遺跡を土着系と外来系に区分し、出土遺物の様相によって文化接変や受容などを説明している（李亨源 2015）。

このように円形粘土帶土器文化を見る視点は、全体としては土着集団と外来集団に分けつつ、生業経済と道具の側面では連続線上で見ることの二重的な立場を取っているのである。繰り返しになるが、青銅器時代中期文化と円形粘土帶土器文化は系統が異なり、その後の三角形粘土帶土器文化で本格的に行われる石器から鉄器への転換に直接関係しているのは円形粘土帶土器文化である。

つまり、青銅器時代中期から円形粘土帶土器文化までを「石器の減少」と見るのはなく、青銅器時代中期の石器の器種と数量の豊富さと対比される現象として、円形粘土帶土器段階の石器様相を確認し、その背景を検討しなければならない。一般的に議論されているように、円形粘土帶土器集団の生業経済が稻作農耕ではなく、狩猟にもっと比重を置いた混合経済（盧赫眞 2001b；宋滿榮 2011 など）であったなら、石器組成もそうであったはずであり、その後の鉄器に置き換えられる過程も混合経済に対応する道具構成の観点から見なければならない。また、単に石器から鉄器への過程ではなく、石器→木器→鉄器または器種による多様な様相などを考慮する必要があり、このような検討の前提が円形粘土帶土器段階の石器組成とその背景を確認することである。

このような認識の問題は別として、実際の石器の消滅過程に関する研究は非常に少ない。石器の減少を簡単に述べる程度に過ぎず、具体的に円形粘土帶土器段階から三角形粘土帶土器段階までの道具の変化を検討した例は李錫凡（2015）程度に過ぎない。おそらくこれは、先に述べたように「過渡期」、「移行期」としての考古学的様相が曖昧であるからと思われる。

もう一つの問題は、土着系石器と外来系石器の区分である。円形粘土帶土器集団のように何らかの要因で外部から入ってきた場合、その文化要素はもともとその集団が持っていたもの、定着地の文化要素を受容したもの、定着後に新たに登場したものなどに分けることができる（李基星 2008）。しかし、この概念を円形粘土帶土器文化の石器に対応させるには問題がある。一般的に円形粘土帶土器遺跡で確認される石器器種のうち、三角形石鏃だけが円形粘土帶土器集団の伝統的な器種であり、有莖式石鏃や三角形石刀、有溝石斧は土着の松菊里文化要素を受容したものと理解される。しかし、円形粘土帶土器文化の伝統的な石器器種及び形式は明確ではない。韓半島の円形粘土帶土器の起源地とされる代表的な遺跡である鄭家窪子遺跡、公主屯后山遺跡（朴淳發 2003；朴晉一 2013）で住居は公主屯后山遺跡のみで、両刃石器1点だけが出土している。そのため、時期的に重複すると判断される松菊里文化では確認されない器種である三角形石鏃を円形粘土帶土器文化の伝統的な石器と判断し、松菊里文化で確認される有莖式石鏃、三角形石刀、有溝石斧を受容された文化要素として理解しているのである。

円形粘土帶土器文化の石器組成を明確に理解するためには、伝統的な器種と新たに受容された器種などを区別する必要がある。しかし、半月形石刀の不在が円形粘土帶土器集団の伝統的な石器組成なのか、それとも韓半島に定着した後、適応の過程でなくなった器種であるのかの判断は現時点では難しい。今後の検討が必要な点である。

このような問題を認識し、次章では湖西地方を対象に、円形粘土帶土器段階の石器組成を検討する。

II. 湖西地方における円形粘土帶土器段階の石器組成

湖西地方で円形粘土帶土器が出土した遺跡は、33ヵ所³⁾に達するが、ほとんどが忠南地方に分布し、忠北地域は数少ない（図1）。このうち、三角形粘土帶土器が出土する遺跡は瑞山道堂里ザグンドルゴル遺跡の焼成遺構と遺物包含層のみで、ほとんどが円形粘土帶土器段階の遺跡である点が特徴的である。

1. 湖西地方の円形粘土帶土器段階の遺跡

図1の遺跡は、その性格によって次の4つのタイプに分類することができる。

- ①粘土帶土器出土の墳墓のみが単独で確認される遺跡。
- ②松菊里型住居から粘土帶土器が出土する遺跡。
- ③青銅器時代の住居などと共に粘土帶土器が出土する遺構が確認される遺跡。
- ④円形粘土帶土器段階の集落遺跡

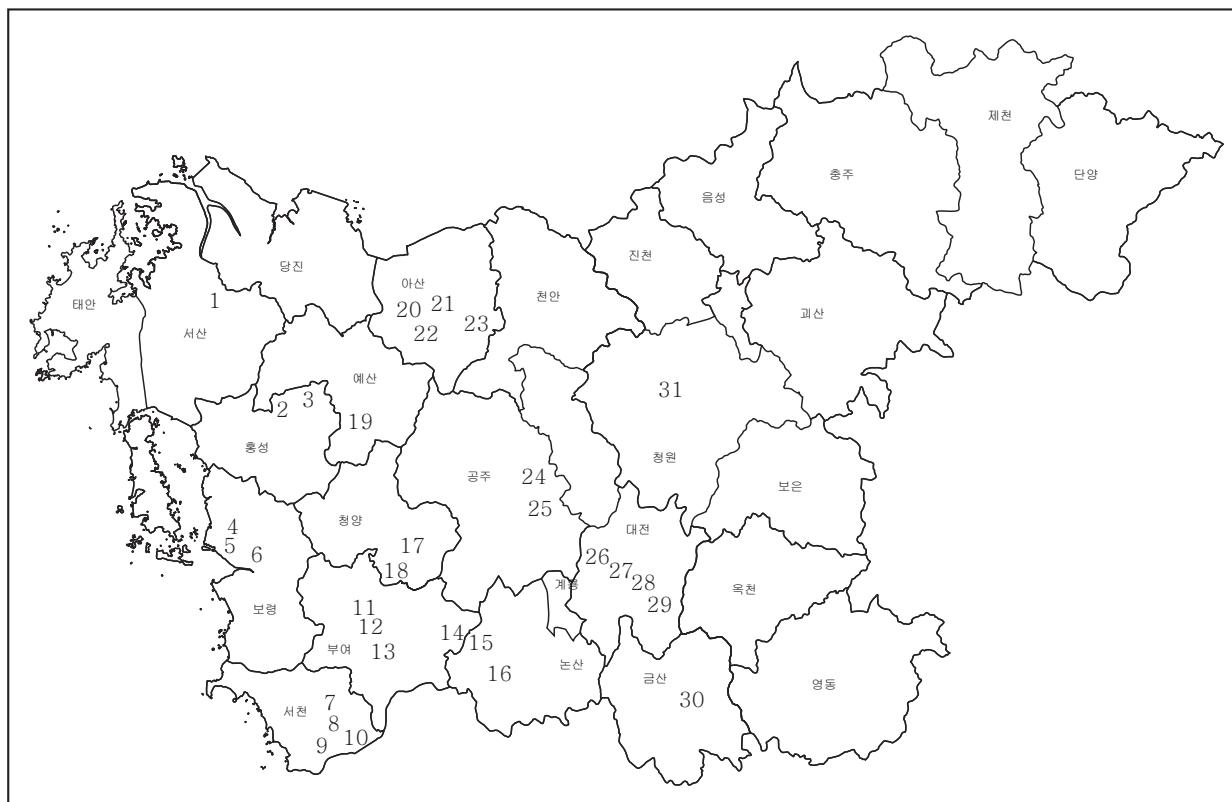


図1 湖西地方の円形粘土帶土器段階の遺跡分布図

- ①瑞山道堂里ザグンドルゴル遺跡 ②洪城新耕里・礼山沐里遺跡 ③洪城新耕里・礼山沐里遺跡Ⅱ
- ④保寧真竹里遺跡 ⑤保寧校成里遺跡 ⑥保寧寬倉里遺跡 ⑦舒川鳳仙里遺跡 ⑧舒川月岐里遺跡
- ⑨舒川楸洞里遺跡 ⑩舒川道三里遺跡 ⑪扶余羅福里遺跡 ⑫扶余合松里遺跡 ⑬扶余九鳳里遺跡
- ⑭扶余蓮花里遺跡 ⑮論山院北里遺跡 ⑯論山定止里遺跡 ⑰青陽鶴岩里遺跡 ⑱青陽分香里遺跡
- ⑯礼山東西里遺跡 ⑳牙山南城里遺跡 ㉑牙山権谷洞遺跡 ㉒牙山豊基洞アプゴル遺跡 ㉓牙山デチュリ遺跡
- ㉔公州長院里遺跡 ㉕公州水村里遺跡 ㉖大田老隱洞遺跡 ㉗大田弓洞遺跡 ㉘大田槐亭洞遺跡
- ㉙大田加午洞遺跡 ㉚錦山水塘里遺跡 ㉛清原馬山里遺跡 ㉜清州佳景洞遺跡 ㉝忠州虎岩洞遺跡

①円形粘土帶土器または関連遺物が出土する墳墓のみが確認される遺跡は牙山南城里遺跡（国立中央博物館 1977）、牙山權谷洞遺跡（中央文化財研究院 2006）、礼山東西里遺跡（池健吉 1978）、大田槐亭洞遺跡、扶余合松里遺跡（李健茂 1990）、扶余九鳳里遺跡（李康承 1987）、扶余蓮花里遺跡（金載元 1964）、扶余青松里遺跡（国立扶余文化財研究所 2017）などがある。牙山權谷洞遺跡を除けば、すべて偶然発見され、収拾調査が行われたもので、墳墓単独で確認されたが正式な発掘ではないため、遺跡全体の様相は不明である。牙山權谷洞遺跡の土坑墓も青銅器時代や粘土帶土器段階の他の遺構はなく、単独で確認されている。このなか、石器が出土した墳墓は牙山權谷洞遺跡の土坑墓から三角形石鏃 3 点、礼山東西里遺跡の三角形石鏃 6 点、大田槐亭洞遺跡の三角形石鏃 3 点、扶余青松里遺跡の三角形石鏃 3 点など、石鏃のみが出土している。墳墓遺跡のほとんどは青銅器が共伴され、一部は鉄器も一緒に出土しているが、出土する石器は石鏃のみで、当時の石器組成を語ることは難しい。

②松菊里型住居から粘土帶土器が出土する湖西地方の遺跡は少なくない。このような遺跡としては、公州長院里遺跡（忠清埋蔵文化財研究院 2001、2 基の松菊里型住居のうち 1 基から粘土帶土器が出土した。以後、前者は松菊里型住居の数、後者はそのうち粘土帶土器が出土した住居の数）、青陽鶴岩里遺跡（忠清南道歴史文化研究院 2005a、22 基のうち 1 基）、大田弓洞遺跡（忠南大学校博物館 2006、10 基のうち 3 基）、大田加午洞遺跡（中央文化財研究院 2003、8 基（4 基は前期）のうち 1 基）、扶余羅福里遺跡（忠清南道歴史文化研究院 2004、22 基のうち 1 基、粘土帶土器段階の住居 1 基）、舒川道三里遺跡（高麗大学校考古環境研究所 2005a、30 基のうち 1 基）、舒川月岐里遺跡（高麗大学校考古環境研究所 2005b、14 基のうち 1 基、粘土帶土器段階の環濠）、保寧真竹里遺跡（忠南大学校博物館 2013、11 基のうち 4 基と窯 2 基のうち 2 基）、保寧寛倉里遺跡（高麗大学校埋蔵文化財研究所 2001、亜州大学校博物館 1999、190 基以上のうち 3 基）などがある。一般的には土着の松菊里文化集団に外来系である粘土帶土器集団の文化要素が受容されたと言われているが、遺跡のうちごく少数の住居、特に上位階層に分類できる住居から出土している点が特徴的である（李亨源 2015）。松菊里文化を基盤とする遺跡であるため、出土する石器の組成も一般的な松菊里文化の様相と同じである。

③青銅器時代の住居と共に粘土帶土器出土遺構が確認される場合として、牙山豊基洞アプゴル遺跡（忠清文化財研究院 2009b）、洪城新耕里・礼山沐里遺跡（忠清南道歴史文化研究院 2013）、公州水村里遺跡（清南道歴史文化研究院 2007）、青陽分香里遺跡（忠清南道歴史文化研究院 2006）、大田老隱洞遺跡（韓南大学校中央博物館 2003）、論山院北里遺跡（中央文化財研究院 2001）、舒川鳳仙里遺跡（忠清南道歴史文化研究院 2005b）、舒川楸洞里遺跡（忠清文化財研究院 2005）、錦山水塘里遺跡（忠南大学校百濟研究所 2002）、清原馬山里遺跡（中央文化財研究院 2005）、論山定止里遺跡（嘉耕考古学研究所 2013；忠南大学校博物館 2000）、清州佳景洞遺跡（中央文化財研究院 2007；中原文化財研究院 2006；韓国考古環境研究所 2014）、忠州虎岩洞遺跡（中原文化財研究院 2017）などがある。

このタイプの遺跡が重要な意味を持つのは、粘土帶土器段階単純期の遺跡の可能性があるからである。もし他の青銅器時代の遺跡と粘土帶土器出土遺跡が時間的に重なっていることが明らかであれば、土着集団と外来集団の共存を示す積極的な証拠となり、時間的な差を置いたことが確認できれば、粘土帶土器段階単純期の遺跡と言える。

④円形粘土帶土器段階単純期遺跡は、牙山デチュリ遺跡（忠清文化財研究院 2009a）、洪城新耕里・礼山沐里遺跡Ⅱ（忠清南道歴史文化研究院 2016）、保寧校成里遺跡（国立扶余博物館 1987）、瑞山道堂里ザグンドルゴル遺跡（忠清文化財研究院 2013）などがある。このような円形粘土帶土器段階単純期遺跡は、円形粘土帶土器集団の石器組成を把握する上で重要な遺跡であり、舒川楸洞里遺跡の粘土帶土器出土住居と一緒に次節で詳しく説明する。

2. 円形粘土帶土器段階の石器組成

円形粘土帶土器段階の石器組成を確認するためには、円形粘土帶土器段階単純期の遺跡、かつ可能な限り住居遺跡（孫峻鎬 2008）を対象としなければならない。湖西地方で円形粘土帶土器段階の単純期遺跡としては、牙山デチュリ遺跡、洪城新耕里・礼山沐里遺跡Ⅱ、保寧校成里遺跡、瑞山道堂里ザグンドルゴル遺跡、そして前述した舒川楸洞里遺跡を挙げることができる。このうち、瑞山道堂里ザグンドルゴル遺跡の場合、20 基の焼成遺構と遺物包含層から円形粘土帶土器と三角形粘土帶土器が出土しているが、石器は出土しないため、以下の検討では除外した。

各遺跡の概要と石器組成は以下の通りである（図 2、3）。

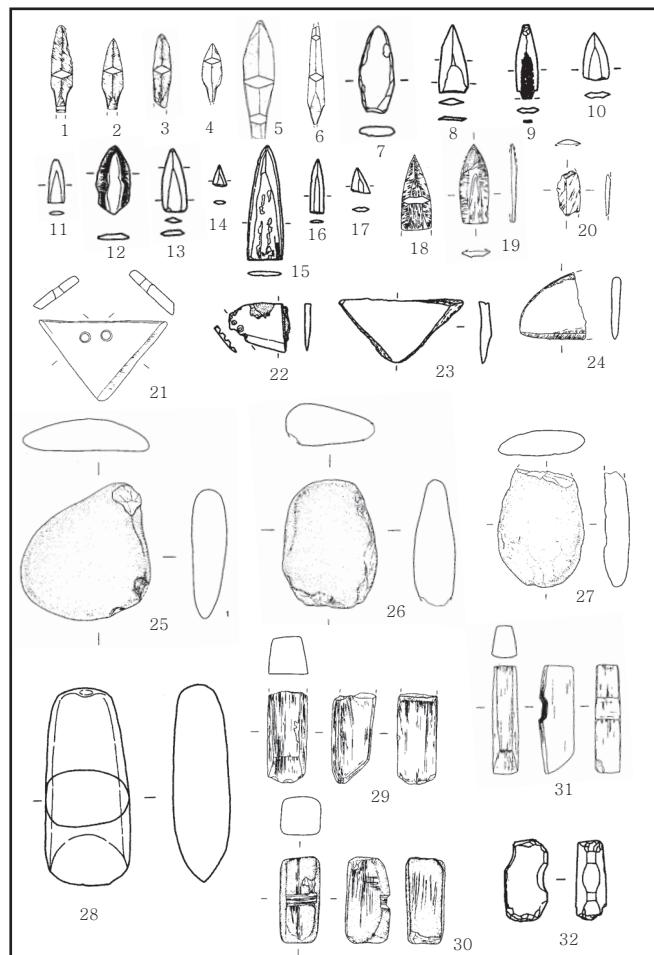


図2 石鎌（デチュリ：1～6、校成里：7～17、楸洞里：18～20）、石包丁（デチュリ：21、校成里：22・23、楸洞里：24）、石斧（デチュリ：25～27、校成里：28）、有溝石斧（デチュリ：29～31、校成里：32）（縮尺 1/6）

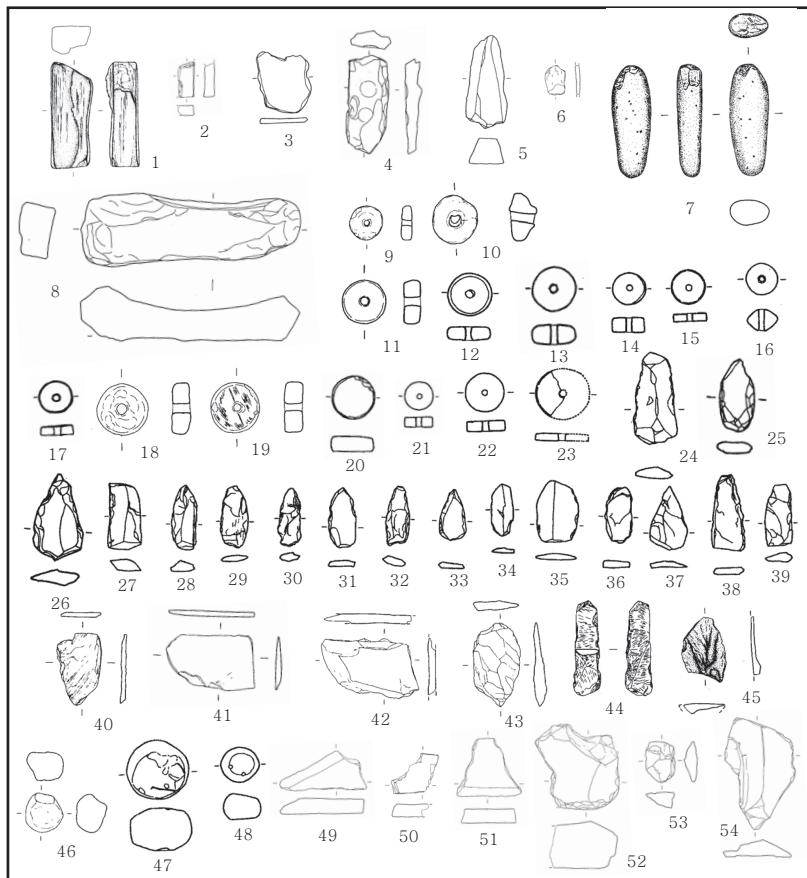


図3 砥石（デチュリ：1、沐里Ⅱ：2、校成里：3～5・8、楸洞里：6）、敲石（楸洞里：7）、土製紡錘車（デチュリ：9・10、沐里Ⅱ：11、校成里：12～17、楸洞里：18・19）、石製紡錘車（校成里：20～23）、石鎌未成品（校成里：24～39）、多面石器（デチュリ：46、校成里：47・48）、石材（沐里Ⅱ：49～54）、其他（デチュリ：41～43、楸洞里：44・45）（砥石、石材は縮尺1/12、その他1/6）

①牙山デチュリ遺跡では小高い丘陵の頂上と緩やかな斜面から住居17基と竪穴3基が調査された。住居は平面（未角）方形に中央楕円形竪穴を持つ休岩里式住居（1号、10号、11号）と平面円形に中央に楕円形竪穴を持つ松菊里型住居（14号）、平面方形に内部施設を持たない住居など3種類（2号、4号、6号、7号、8号、12号、13号、15号、16号、17号）に区分される。このうち、内部施設がない住居を水石里式住居として把握している（忠清文化財研究院2009a:225）。

休岩里式住居は円形粘土帶土器段階より古い時期であるため、問題はないが、松菊里型住居である14号住居が円形粘土帶土器が出土する住居と同時期に存在したのか、それとも時間的な差があったのかは明らかではない。報告者は、松菊里型住居から遺物が出土する内部堆積層と円形粘土帶土器住居の内部堆積層が同じであることを根拠に、同時期ではないが時間的な差はほとんどないと理解しているようである。そうすると、まだ14号住居が堆積される前に円形粘土帶土器住居が造成されたということになるが、数mの間隔を置いて廃棄された松菊里型住居の近くに新たな住居を造成したということは容易に納得できない。14号住居からは石器は石製紡錘車1点のみ出土した。

校成里遺跡を除いて、デチュリ遺跡で最も多くの石器が出土したが（表1）、問題となるのは円形粘土帶土器段階の遺物ではなく、13号住居から出土した三角形石刀（図2-21）と3号、5号、15号、16号住居から出土した一段茎式石鏸（図2-1～6）である。報告者は三角形石刀は遺構上層、一段茎式石鏸は内部堆積層から出土するため、混入の可能性があるが、16号住居の床面から出土した一体型石鏸は粘土帶土器段階の石鏸の一形式である可能性を述べている（忠清南道文化財研究院2009a：229）。

デチュリ遺跡出土の石器組成の特徴は、半月形石刀などの収穫具がないこと、有溝石斧が比較的多いこと（図2-29～31）、石斧（図2-25～27）の場合、自然面を残したまま大まかに剥離して形を作ったことである。一般的な石器組成と比べると、扁平片刃石斧、小型柱状片刃石斧などの加工工具が見られない。また、報告書に石皿として報告された8号住居出土品（図3-1）は、四面が全て磨かれている点から砥石と思われるが、そうであれば食料加工工具も見えない。

表1 牙山デチュリ遺跡の水石里式住居

遺構	平面形態	内部施設	規模 (長軸×短軸×深さ)cm	出土石器	その他
2号(住)	末角長方形	柱穴	549×(残)373×54	有溝石斧(1)	土製紡錘車(1)
3号(住)	末角方形	炉、柱穴	505×430×50	(推)石斧(1)、一段茎式石鏸(2)、磨研石器(1)	土製紡錘車(1)
4号(住)	末角長方形	炉、柱穴	500×(残)334×24	有溝石斧(1)	
5号(住)	末角方形	楕円形豎穴、柱穴	494×380×54	陵形鏸(1)、未詳石器(1)	
6号(住)	(季)長方形		(残)614×(残)414×19	有溝石斧(1)、(推)石斧(1)、磨研石器(1)	
7号(住)	末角長方形	炉	317×217×24		
8号(住)	長方形		(残)453×(残)268×35	砥石(1、報告書には石皿)	
9号(住)	末角長方形		(残)500×(残)233×32	磨研石器(1)	8号と切り合 い、9号が後
12号(住)	末角方形	炉、柱穴	440×388×39	剥片石器(1)	
13号(住)	長方形	炉、柱穴	476×348×48	石斧(1)、三角形石刀(1、最上層出土)	
15号(住)	末角方形	炉、柱穴	489×?×32	一段茎式石鏸(1)	
16号(住)	末角方形	柱穴	410×(残)340×65	一段茎式石鏸(2)、多面石器(1)	
17号(住)	末角方形	炉、柱穴	448×(残)286×61		
1号(豎穴)	楕円形		172×94×28		
2号(豎穴)	円形		(季)120×26		
3号(豎穴)	円形		(残)78×(残)70×22		

②洪城新耕里・礼山沐里遺跡Ⅱ（忠清南道歴史文化研究院 2016）は湖西地方で稀に発見される円形粘土帶土器段階の単純期遺跡で、B-I 区域で粘土帶土器段階の住居 13 基と竪穴 2 基が調査された。住居はほとんどが丘陵の中央部平坦面に位置しているが、住居から出土した石器は少ない（表2）。砥石 1 点を除いて器種を把握できるものはほとんどなく、石材が主である。住居の形態も整然としておらず、一部の住居の柱穴を除けば内部施設も確認できず、住居の深さ（残存している深さを示す。以下同じ）が 10～20 cm 前後と非常に浅いことから、短期間居住の住居であったと考えられる。土器も破片の状態のみで出土する。出土する石材は花崗岩、砂岩、石英斑岩（図 3-49～54）など、蛤刃石斧や砥石として使用される可能性のあるものである。

表2 洪城新耕里・礼山沐里遺跡Ⅱの遺構

遺構	平面形態	内部施設	規模 (長軸×短軸×深さ)cm	出土石器	その他
1号(住)	末角長方形	柱穴	388×278×14		1号竪穴と切り合 い、住居が後行
2号(住)	末角方形		378×297×16	石材(1)	
3号(住)	末角方形	小孔	410×381×12	石材(3)	4号住居と切り合 い、3号が後行
4号(住)	楕円形	柱穴	460×308×18		土製紡錘車
5号(住)	不定形	小孔、柱穴	469×233×25		
6号(住)	楕円形		316×240×30		
7号(住)	円形		(径)214×25		
8号(住)	円形		(径)264×11		
9号(住)	円形		(径)214×14		
10号(住)	楕円形	柱穴	360×312×20	石材(1)	
11号(住)	円形	竪穴	416×375×24	砥石(1)、石材(1)	
12号(住)	楕円形		(残)306×292×24		
13号(住)	長方形	柱穴	(残)424×408×26		
1号(竪穴)	方形		194×(残)130×15		
2号(竪穴)	楕円形		134×69×22		

③よく知られている保寧校成里遺跡（国立扶余博物館 1987）は、標高 160 m の頂上部の平坦地に 9 基の住居が確認されたが、全て方形住居であり、深さは 50 cm 前後から 75 cm までと他の粘土帶土器段階の住居に比べてかなり深く、出土した石器も他の遺跡に比べて非常に豊富である（表3）。

校成里遺跡の石器組成でまず最も目立つのは、8号住居のみから土着文化の石器である三角形石刀（図2-22）と有溝石斧が出土しており、他の遺跡とは異なり、石製紡錘車（図3-20～23）が出土していることである。また、石鏃未成品（図3-24～39）が非常に多く発見される。三角形石刀は土着集団との交流の証拠だけでなく、農耕の証拠として重要な意味を持つ。

④舒川楸洞里遺跡で粘土帶土器が出土する住居3基のうち、10号と11号の2基のみ石器が少量出土するが（表4）、土着系文化要素である半月形石刀（図2-24）と菱形鏃（図2-20）が出土する点が特徴である。同じ丘陵上に分布しているにもかかわらず、楸洞里遺跡の他の青銅器時代住居がほとんど50cm以上の深さを持つのに比べ、10号と11号住居は深さが33cm、12号は9cmに過ぎず、非常に浅く内部施設も全く確認されていない。

以上の粘土帶土器単純期の住居遺跡からの出土石器を見ると、牙山デチュリ遺跡の13基で20点

表3 保寧校成里遺跡の住居

遺構	平面形態	内部施設	規模 (長軸×短軸×深さ)cm	出土石器	その他
1号(住)	(長)方形	炉(2)、貯蔵穴	335×(残)300×75	三角形石鏃(2)	土製紡錘車(1)
2号(住)	(長)方形	炉(2)	307×(残)250×55	蛤刃石斧(1)、砥石(1)、三角形石鏃(2)、石鏃石材(1)	3号と隣接
3号(住)	(長)方形	炉(1)	285×(残)235×70	三角形石鏃(1)、砥石(1)	
4号(住)	(長)方形	炉(1)、柱穴	(残)307×(残)220×50	砥石(1)、三角形石鏃(2)、石鏃石材(2)	土製紡錘車(1)
5号(住)	(長)方形	炉(1)	(残)300×(残)260×70	石鏃石材(7)	石製紡錘車(2)
6号(住)	(長)方形	炉(1)、土壙	(残)265×260×57		石製紡錘車(1)、土製紡錘車(1)
7号(住)	(長)方形	炉(1)	(残)430×(残)225×85	三角形石鏃(1)、石鏃石材(1)	土製紡錘車(1)
8号(住)	(長)方形	炉(1)、土壙	(残)325×(残)290×53	有溝石斧(1)、石鑿(1)、三角形石刀未成品(1)、三角形石刀(1)、砥石(1)、三角形石鏃(1)、石鏃石材(3)	石製紡錘車(1)
9号(住)	(長)方形	炉(1)	345×(残)260×70	石鏃石材(1)、多面石器(2)	土製紡錘車(1)

表4 舒川楸洞里遺跡の粘土帶土器段階の住居

遺構	平面形態	内部施設	規模 (長軸×短軸×深さ)cm	出土石器	その他
10号(住)	末角長方形		470×240～285×33	三角形石鏃(1)、砥石(1)、半月形石刀(1)、敲石(1)、未詳石器(2)	土製紡錘車(2)
11号(住)	(推)長方形		510×(残)300×33	三角形石鏃(1)、菱形鏃(1)	
12号(住)	(推)長方形		255×(残)155×9		

(1基当たり 1.5 点)、洪城新耕里・礼山沐里遺跡Ⅱの 11 基で石器 7 点 (1基当たり 0.6 点)、保寧校成里遺跡の 9 基で 39 点 (1基当たり 4.3 点)、舒川楸洞里遺跡の 3 基で 8 点 (1基当たり 2.7 点) と遺跡別に石器出土数に差がある。校成里遺跡で比較的数多くの石器が出土するのは丘陵の頂上に位置したため、住居の削平がひどくなかったからかもしれない。そこで、他の遺跡の石器組成の貧弱さが削平によるものであるのかを確認するために各遺跡別に住居の調査面積⁴⁾、深さ、1 m²当たりの出土土器と石器数を比較したのが表 5 である。

同じ丘陵で青銅器時代住居と円形粘土帶土器段階の住居が一緒に調査された牙山デチュリ遺跡と舒川楸洞里遺跡で共通するのは、青銅器時代住居に比べて粘土帶土器段階住居の深さが浅いことである。保寧校成里遺跡を除き、粘土帶土器段階住居の深さが浅いのは共通した特徴であり、これはもともと造成段階から青銅器時代住居に比べ浅く掘削されたことを意味する。

遺物出土に関しては、デチュリ遺跡の場合、青銅器時代の住居と粘土帶土器段階住居の土器、石器の出土数にそれほど大きな差は見られない。しかし、楸洞里遺跡の場合、むしろ粘土帶土器段階住居ではるかに多くの出土量が確認される。これは楸洞里 10 号住居から多量の遺物が出土したためであり、明確な傾向とは言えないが、いずれにせよ、青銅器時代住居に比べ粘土帶土器段階住居の石器数が絶対的に出土量が少ないと断言することはできないと思われる。また、洪城新耕里・礼山沐里遺跡Ⅱの場合、土器に比べ石器の出土数が極めて少ないという点が目立つ。

もちろん、住居の廃棄時の状況、遺跡の残存状態など、遺物の出土数量には様々な要因があるが、これは各遺跡ごとの様相に違いがあることで、青銅器時代住居に比べて粘土帶土器段階住居の出土遺物の数が少ないと断言することはできないと思われる。

むしろ問題となるのは、器種構成の不均衡である (表 6)。

表 6 は、青銅器時代の一般的な石器器種の出土の有無を示したもので、出土する器種としない器種がすべての遺跡で非常に共通していることがわかる⁵⁾。まず、出土しない器種としては、石剣、土堀具、扁平石斧、石鑿、磨石／石皿、漁網錘などである。そのうち、一部の遺跡のみから出土する半月形石刀 (三角形石刀を含む)、有溝石斧と一段茎式石鎌 (一体型石鎌を含む) は土着文化系の石器である。

表 5 遺跡別土器及び石器の出土

遺跡	平均面積 (m ²)	平均深さ (cm)	土器出土数 (1m ² 当たり)	石器出土数 (1m ² 当たり)
牙山デチュリ遺跡 (青銅器時代)	13.5	55.6	0.83	0.12
牙山デチュリ遺跡 (粘土帶土器文化)	15.1	43.7	0.81	0.1
舒川楸洞里遺跡 (青銅器時代)	15.36	56.1	0.09	0.12
舒川楸洞里遺跡 (粘土帶土器文化)	14.35	33	2.54	0.29
保寧校成里遺跡	8.2	65	0.4	0.36
洪城新耕里・ 礼山沐里遺跡Ⅱ	9.4	20	0.58	0.06

表6 粘土帶土器段階遺跡別出土石器器種（出土数（%））

器種	遺跡	デチュリ遺跡	礼山沐里遺跡Ⅱ	校成里遺跡	楸洞里遺跡
石劍					
石鎌	6 (40)			10 (23.8)	3 (37.5)
土堀具					
石刀				2 (4.8)	1 (12.5)
蛤刃石斧	3 (20.0)			1 (2.4)	
有溝石斧	3 (20.0)			1 (2.4)	
扁平片刃石斧					
石鑿					
砥石	1 (6.7)	1 (12.5)		4 (9.5)	1 (12.5)
石器加工工具					1 (12.5)
磨石／石皿					
漁網錐					
紡錘車	2 (土) (13.3)	1 (土) (12.5)		5 (土)、4 (石) (21.4)	2 (土) (25.0)
未成品				15 (35.7)	
石材		6 (75.0)			
その他	6			2	2

これらの土着文化系の石器は、一般的に言われているように、土着の青銅器時代中期の集団と円形粘土帶土器集団との交流の証拠として見ることができる。特に石鎌の場合、土着系と外来系の形式が共存しているが、半月形石刀と有溝石斧はそれに対応する粘土帶土器文化系の石器は確認されない。これらの土着系石器は、湖西地方に定住した円形粘土帶土器集団が現実的な必要によって受け入れたものであり、これは土器文様要素の受容などとは原因が異なる。三角形石鎌と有茎鎌は矢じりの挿入方法が異なり、これはある程度環境的な要因によるものであるから（李基星・朴柄旭2013）、地域的な適応の結果であると考えてよいと思われる。松菊里文化において有溝石斧は木工具として理解されるが、粘土帶土器文化において有溝石斧は土堀具の機能を含む多目的ツールとして使われたとの指摘（盧姵眞2001a）は非常に重要である。

いずれにせよ、円形粘土帶土器文化の石器組成に土着系石器が含まれるのは、交流の証拠とともに機能的な側面も考慮しなければならない。以上の特徴をまとめると次のようになる。

- ①生業経済に関連する道具が極端に偏っている。狩猟具である石鎌のみが出土し、農耕に関連する道具は極めて少ない。漁具や食料加工工具も確認されない。
- ②木材加工工具は、伐採石斧と有溝石斧のみが確認され、扁平片刃石斧や石鑿は出土しない。特に伐採石斧の場合、自然面が残っており、大まかな形に調整されたものが多数を占める。
- ③石材及び未成品が相当数出土し、砥石も比較的多く出土する。
- ④主に土製紡錘車が出土する。

では、このような石器組成の偏重はどのように解釈すべきか。

III. 円形粘土帯土器段階における石器組成の問題点と背景

このような石器器種の偏重が結局、青銅器時代中期の土着集団の生業経済との違いを反映していると理解し、円形粘土帯土器集団の生業経済を狩猟への高い依存度（宋満榮 2011）、雑穀農耕を含む植物耕作、漁労と狩猟などが混合された複合的な生計経済（盧赫眞 2001b）、雑穀農業と狩猟及び野生植物採集（金承玉 2017）などの混合経済（張智鉉 2015；鄭汝善 2010）などと推定している。狩猟具の比重が低く、漁労具が相当量出土する嶺南地方や狩猟具の比重が高い中部地方の生業経済方式とは違いがあったはずであり、嶺南地方の野生動物は外部集団から供給された資源である可能性が指摘（高允済 2012）されることもある。

実際、このような指摘は非常に妥当である。不定形で浅く掘削され、内部施設も定型化されていない住居、青銅器時代中期の集落と比較すると小規模単位の集落、偏った石器組成などを見ると、円形粘土帯土器集団が長期にわたる定住的稻作農耕を営んでいたとは考えにくい。湖西地方の場合、松菊里型集落の立地と円形粘土帯土器段階の集落の立地が低丘陵性でほぼ同じであるにもかかわらず、このような生業経済の違いは十分に認められる。これは湖西地方だけの現象ではなく、湖南地域の粘土帯土器段階の集落も低丘陵地に位置しているが、石器組成は湖西地方と大差ない（張智鉉 2015）。

しかし、このような石器器種の偏重現象の要因を生業経済だけに求めることはできないと思われる。どのような生業経済を営んでいたとしても、基本的に当時の生活様式で必要と推定される道具がある。まず、竪穴住居の造成や農耕のための土堀具や収穫具、穀物類や採集食料を加工するための磨石／石皿、木器の細かな加工のための石鉋、石鑿などの小型の片刃石器類などがあるはずだが、遺跡からは出土しない。もちろん、当時使用されていた道具の器種が単一の遺跡ですべて揃った状態で出土することは難しいが、墳墓出土品などを含めても湖西地方の円形粘土帯土器段階の遺跡で全く発見されない器種がいくつもあることは、単に遺存程度の問題とは考えられない。

このような石器器種の偏重の理由は次のような可能性が考えられる。

- ①鉄器が登場するまでは、青銅器が実用器として石器に代わっていた。しかし、遺存が難しく、確認されていないだけである。
- ②鉄器が円形粘土帯土器文化から使用されていたが、現存する例はない。
- ③円形粘土帯土器段階の集団は、土着集団との交流を通じて、生業経済は外部集団、おそらく松菊里文化集団に依存していた。つまり、食料などを外部から調達していたため、農耕関連の道具が見つからない。
- ④円形粘土帯土器段階の集団の主な道具は木器であったが、遺存例がなく、道具の構成が貧弱であるように見える。
- ⑤実際に石器が使用されたことはあるが、土着集団の石器のように定型化された器種は少ない。一部の器種を除き、単純に製作された石器を使用し廃棄した。つまり、形が機能に大きな影響を与える石鎚を除き、その他の器種は簡単に製作し、使用した後もすぐ廃棄するものであり、住居に残っていない。

このうち、①の円形粘土帶土器段階に青銅器が実用器として使われたとは考えにくい。もちろん、公州水村里遺跡の土坑墓から円形粘土帶土器と共に銅斧、銅鐸などが出土した事例はあるが、小規模な集落で青銅器を実用器として使用したと考えるのは無理があると思われる。②の場合、実際の出土例がなく、円形粘土帶土器段階は鉄器登場以前の時期と理解されているため、やはり議論の対象になりにくい。③の場合、前述したように嶺南地方の泗川芳芝里遺跡では、狩猟具の割合が極めて少ないにもかかわらず、少なくとも45個体に及ぶ哺乳類動物遺存体が確認され、周辺の土着集団から野生動物を調達し、貝類を提供する交易網を設定する研究もある（高恩暉 2012）。そのような側面から考えると、石鎌が圧倒的に多く出土する湖西地方の場合、嶺南地方とは逆の場合を考えることができる。もし農耕で収穫された穀物類を松菊里文化集団から調達し、その反対給付として円形粘土帶土器集団が狩猟の収穫物を提供したのであれば、土着の松菊里文化集団と円形粘土帶土器集団との交流が認められる松菊里型住居から粘土帶土器が出土する遺跡の石器組成は狩猟具が少ないと想定される。

しかし、表7から分かるように、各遺跡ごとに出土割合に差はあるものの、ほとんどの遺跡で狩猟具に該当する石鎌と石剣はかなりの割合で出土している。もし、粘土帶土器文化集団が松菊里文化集団から農耕収穫物を調達したのであれば、その反対給付として円形粘土帶土器集団が提供できるものがあるはずだが、道具組成の面では確認が難しい。さらに、両集団の立地も類似しており、数十棟以上の松菊里文化集団と小規模の円形粘土帶土器集団の規模差からすると、そのような相互調達関係が成立することは困難であったと思われる。結局、円形粘土帶土器集団の石器偏重は他の要因に求めるべきである。

④の場合は十分に想定することはできる。日本の場合、石器から鉄器への移行過程で最も最初に置き換えられるのは工具類である。鉄器が持つ物性的特性から期待される効果、すなわち生産性の

表7 青銅器時代住居遺跡別出土石器器種（松菊里文化集団）（出土数（%））

器種\遺跡	長院里遺跡	鶴岩里遺跡	弓洞遺跡	加午洞遺跡	羅福里遺跡	道三里遺跡	月岐里遺跡	真竹里遺跡
石剣	2 (2.5)	3 (9.4)		7 (7.4)	6 (10.0)	2 (5.6)		
石鎌	9 (11.1)	8 (25.0)		40 (42.1)	22 (36.7)	9 (25.0)	32 (40.0)	
土堀具								
石刀	2 (2.5)	2 (6.3)		7 (7.4)	3 (5.0)	2 (5.6)	3 (3.8)	
蛤刃石斧	4 (4.9)	3 (9.4)		5 (5.3)	1 (1.7)	2 (5.6)	3 (3.8)	
有溝石斧	1 (1.2)	3 (9.4)		6 (6.3)	2 (3.3)	2 (5.6)	4 (5.0)	
扁平片刃石斧	4 (4.9)	3 (9.4)		6 (6.3)	2 (3.3)	2 (5.6)	4 (5.0)	
石鑿	1 (1.2)	1 (3.1)				1 (2.8)	4 (5.0)	
砥石	14 (17.3)	6 (18.8)	2 (100)	17 (17.9)		15 (41.7)	8 (10.0)	
石器加工工具				2 (2.1)	23 (38.3)			
磨石／石皿				1 (1.1)				
漁網錘		2 (6.3)						
紡錘車		1 (土) (3.1)		1 (土)、3 (石) (4.2)	1 (土) (1.7)	1 (石) (2.8)	3 (土) (3.8)	
未成品							14 (17.5)	
石材	44 (54.3)						5 (6.3)	
その他	3	45	16		21	85	18	16

向上が重要な意味を持つ器種は、工具類と農具類であるが、このうち農具類は木製のものが古墳時代まで続いたため、工具類、特に石斧類が先に鉄器に置き換えられる。もちろん、置き換えの順序については、大型の伐採部が先に消滅する（織田宜田佳男 1998）、あるいは原材料が少ししかからない小型の石斧類が先に鉄器に置き換えられる（下條信行 1998）などの見解の違いはあるが、鉄器への置き換えの期待効果が最も高い石斧類が先に置き換えられる点は同じである。ここで注目すべきは、鉄器導入後も木製農具類は継続的に使用されている点である。特に木製土堀具の場合、すでに青銅器時代から多様に使用されていたことは指摘されてきたが（金權九 2008）、木製収穫具も同様である。円形粘土帯土器集団の農耕方式については、まだ具体的な証拠が数多くあるわけではないが、最近、益山亀坪里Ⅳ遺跡の初期鉄器時代1号墳の床面から炭化米と粟或いはキビと推定される雑穀が出土しており（全北文化財研究院 2013）、雑穀農耕の痕跡を確認することができ、それに必要な収穫具の存在も想定される。円形粘土帯土器段階に半月形石刀がごく少数出土する様相に対して、木製収穫具の使用を推定することは一つの選択肢になると思われる。

⑤の場合も十分な可能性があると考えられる。石斧の場合、青銅器時代の蛤人石斧のような整然とした形ではなく、簡単な調整によって大まかな形で製作する点、砥石がほとんどの遺跡で出土する点、石材や薄片が多量に出土する点などを見ると、当時の石器製作に多くの労力を費やすことなく、周辺で簡単に手に入る石材を使って必要な石器を製作、使用後に廃棄した可能性を想定することができる。松菊里文化では石製紡錘車の割合が大幅に増加するのに比べ（朴柄旭 2014）、校成里遺跡を除いて土製紡錘車のみが確認されるのも、石器加工の労力を軽減するためと考えられる。

そのため、形が機能に重要な役割を果たす石鎌だけが整然とした形で製作・使用され、それ以外の器種の石器は必要な時に簡便に製作・使用されたため、住居に残されていないといえる。特に墳墓から三角形石鎌だけが出土するのは、当時の石器製作において石鎌だけが整然とした形をしていたからかもしれない。

実際に円形粘土帯土器集団の石器器種偏重現象は、上記の二つの要因の両方に該当すると思われる。例えば、土堀具や収穫具などは木器を使用し、その他の加工工具に該当するものは粗雑に製作、使用後に廃棄するなどの使用方法であったため、現在の器種組成に偏りが生じたと考えられる。

もちろん、以上は推定に基づくものであり、まだ具体的な考古学的事例が確認されているわけではない。また、この推定には、整然としていない石器で木器を加工することができるのかという問題も残されている。それでも、現在までに円形粘土帯土器集団の石器組成の偏重を説明する一つの可能性として提示したい。

おわりに

以上のように、円形粘土帯土器段階の石器は、同じ立地に造営されている土着集団の集落と比較して、特に石器の数が少ないと断定することはできず、むしろ器種組成の偏重にその特徴があるといえる。

生業経済に関連する石器器種は石鎌に偏っており、木材加工工具も一部の器種だけが出土している。そして、石材や未完成品が比較的に多く出土し、伐採石斧の場合、大まかな形だけに調整され

たものがあることがその特徴として挙げられる。

このような石器器種偏重の要因は二つのことが考えられる。一つは木器の使用で、土堀具や収穫具などの農具は木器を使用していたと推定される。実際に出土する遺物の事例は極めて少ないが、青銅器時代中期から普遍化した木器の使用が円形粘土帶土器段階でも一般的であったと考えられる。もう一つは、整然とする形が機能に直接的な影響を与える石鎚を除いて、他の器種の石器は、定型化された形ではなく、大まかな形だけに調整し、短期間使用して廃棄する使用方法であるため、遺跡にあまり残されていないことである。

この二つの要因によって円形粘土帶土器段階の石器組成に偏りが生じたのであり、これを踏まえれば、その後の鉄器への代替を単に石器から鉄器への転換として理解するのではなく、石器から木器や鉄器への転換、石器製作および使用方法の変化など、別の視点で捉える必要があると思われる。

もちろん、このような推定には、まだ出土事例が極端に少ない木器を対象にしており、少ない数の遺物を根拠にしているという点で無理があることは明らかである。他の地域との比較などを通じて韓半島全体の様相を検討する必要があると思われる。今後の課題としたい。

注

- 1) 本論文は筆者の 2018 「호서지방 원형접토대토기 문화의 석기 조성 - 석기 ~ 철기 전환의 전단계」『한국청동기 학보』 22. を翻訳したものである。
- 2) 有溝石斧については、松菊里文化段階の石器であるのか（裴眞晟 2001、2014）、あるいは西北地方に起源するものなのか（朴順發 2004、李亨源 2005）の異説がある。
- 3) 報告書によつては、円形粘土帶土器出土遺構を青銅器時代後期とし、青銅器時代遺構として報告される例も少なくない。本稿では、便宜上青銅器時代前期、中期遺構を青銅器時代遺構、円形粘土帶土器およびそれに関連する黒陶長頸壺、把手付壺などが出土する遺構を円形粘土帶土器段階の遺構と一括した。
- 4) かなりの部分が流失し、全体規模が不明な住居の場合、調査された面積を計算し、深さは最も深いところを基準とした。遺物出土数は土器の場合、接合などで数値が変わることもあるが、全体的な傾向を見るために報告書に報告された数値をそのまま使用した。
- 5) 表 6 と 7 の比率は、「その他」を除いた出土石器を対象に計算した。

参考文献

- 嘉耕考古学研究所 2013 『論山 定止里遺跡』
 高麗大学校考古環境研究所 2005a 『舒川 道三里遺跡』
 高麗大学校考古環境研究所 2005b 『舒川 月岐里遺跡』
 高麗大学校埋蔵文化財研究所 2001 『寛倉里遺跡—B. G 区域』
 高恩望 2012 『慶南西部地域 粘土帶土器文化 生計経済研究』『韓国考古学報』 82
 国立扶余博物館 1987 『保寧 校成里집자리』
 国立扶余文化財研究所 2017 『扶余青松里遺跡』
 国立中央博物館 1977 『南城里 石棺墓』
 金權九 2008 『韓半島 青銅器時代의 木器에 대한 考察』『韓国考古学報』 6
 金範哲 2001 『南韓地域 後期無文土器文化의 性格 研究』『서울学研究』 XVI
 金承玉 2017 『萬頃江一帶 先史文化의 展開와 性格』『湖南考古学報』 55
 金載元 1964 『扶余·慶州·燕岐 出土 銅製遺物』『震檀学報』 25 · 26 · 27 合集
 盧燦眞 2001a 「有溝石斧 再検討」『古文化』 57
 盧燦眞 2001b 「粘土帶土器文化의 社会性格에 대한 一考察」『韓国考古学報』 45
 朴柄旭 2014 『青銅器時代 製糸術 研究』忠北大学校 碩士学位論文
 朴淳發 1997 『漢江流域의 基層文化와 百濟의 形成過程』『韓国考古学報』 36

- 朴淳發 2003 「粘土帶土器文化의 定着過程」『韓國大學博物館協會學術大會』
- 朴淳發 2004 「遼寧 粘土帶土器文化의 韓半島 定着過程」『錦江考古』創刊号
- 朴晉一 2013 「韓半島 粘土帶土器文化 研究」釜山大學校 博士學位論文
- 裴真晟 2001 「柱狀扁平片刃石斧의 變化와 画期」『韓國考古學報』44
- 裴真晟 2014 「石製工具의 確立과 展開」『考古廣場』14
- 孫暎鎬 2008 「石器組成比를 通해 본 青銅器時代 生計와 社會經濟」『青銅器學報』3
- 宋滿榮 2011 「中部地方 粘土帶土器段階 聚集落構造와 性格」『韓國考古學報』80
- 亞州大學校博物館 1999 『寬倉里遺跡—A. F 区域 發掘調查報告書』
- 李康承 1987 「扶余 九鳳里 出土 青銅器 一括遺物」『三佛 金元龍教授 停年退任記念論叢 I』
- 李健茂 1990 「扶余 合松里遺跡出土 一括遺物」『考古學誌』2
- 李基星 2008 「日本 繩文·弥生 転換期의 石器變化」『韓國上古史學報』59
- 李基星 2011 「道具論으로서의 先史時代 石器研究」『韓國 先史時代 社會와 文化的 理解』
- 李基星·朴柄旭 2013 「無文土器時代 磨製石鏃 型式變化 要因에 대한 檢討」『湖西考古學』28
- 李錫凡 2015 「嶺南地域 粘土帶土器段階의 磨製石器 變化相」『韓國青銅器學報』17
- 李清圭 2011 「南韓의 初期鐵器文化에 대한 몇 가지 論議」『史學誌』46
- 李亨源 2005 「松菊里類型과 水石里類型의 接触樣相」『湖西考古學』12
- 李亨源 2015 「住居文化로 본 粘土帶土器文化의 流入과 文化變動」『韓國青銅器學報』16
- 張智鉉 2015 「湖南地域 粘土帶土器文化의 展開樣相과 特徵」『湖南考古學報』제 51 칼
- 全北文化財研究院 2013 『益山 亀坪里 I·II·IV、蓮洞里 I、龍機里 I·II 遺跡』
- 鄭汝善 2010 「中部地方 円形粘土帶土器文化의 展開過程研究」忠南大學校 碩士學位論文
- 中央文化財研究院 2001 『論山 院北里遺跡』
- 中央文化財研究院 2003 『大田 加午洞遺跡』
- 中央文化財研究院 2005 『清原 大栗里·馬山里·楓井里遺跡』
- 中央文化財研究院 2006 『牙山 権谷洞遺跡』
- 中央文化財研究院 2007 『清州 佳景洞遺跡』
- 中原文化財研究院 2006 『清州 佳景洞遺跡』
- 中原文化財研究院 2017 『忠州 虎岩洞遺跡』
- 池健吉 1978 「礼山 東西里 石棺墓 出土 青銅一括遺物」『百濟研究』9
- 忠南大學校博物館 2000 『論山 定止里 百濟聚落址』
- 忠南大學校博物館 2006 『弓洞』
- 忠南大學校博物館 2013 『保寧 真竹里遺跡』
- 忠南大學校百濟研究所 2002 『錦山 水塘里遺跡』
- 忠清南道歷史文化研究院 2004 『扶余 羅福里遺跡』
- 忠清南道歷史文化研究院 2005a 『青陽 鶴岩里遺跡』
- 忠清南道歷史文化研究院 2005b 『舒川 凤仙里遺跡』
- 忠清南道歷史文化研究院 2006 『青陽 分香里遺跡』
- 忠清南道歷史文化研究院 2007 『公州 水村里遺跡』
- 忠清南道歷史文化研究院 2013 『洪城 新耕里·礼山 沐里遺跡』
- 忠清南道歷史文化研究院 2016 『洪城 新耕里·礼山 沐里遺跡 II』
- 忠清埋藏文化財研究院 2001 『公州 長院里遺跡』
- 忠清文化財研究院 2005 『舒川 楸洞里遺跡』
- 忠清文化財研究院 2009a 『牙山 長在里·大추리·蓮花洞遺跡』
- 忠清文化財研究院 2009b 『牙山 豊基洞앞골遺跡』
- 忠清文化財研究院 2013 『瑞山 道堂里작은들골遺跡』
- 韓國考古環境研究所 2014 『清州 佳景洞遺跡』
- 韓南大學校中央博物館 2003 『大田 老隱洞遺跡』
- 禰宜田佳男 1998 「石器から鐵器へ」『古代國家はこうして生まれた』
- 下條信行 1998 『日本における石器から鐵器への転換形態の研究』平成 7~9 年度科学研究費 補助金基盤研究 (B) 研究成果報告書

(韓國傳統文化大學融合考古學科教授)

Stone-tool Assemblages of Pottery with Round Clay Stripes Stage in Hoseo Region

by

Kisung Yi

The transition period from the Stone Age to the Metal Ages in the Korean Peninsula ranges from the Middle and Late Bronze Age to the stage of pottery with round clay stripes to the stage of pottery with triangular round clay stripes. During this period, stone tools were replaced with bronze tools for prestige goods, and stone tools were replaced with iron tools for practical tools. However, the actual archaeological patterns of these changes have not been clearly identified. A general perception is that changes in materials used for tools should undergo the “transition period” during which existing materials gradually decrease and new materials steadily increase, and then reach the stage in which the adoption of new materials is fully established. However, this was not the case for the transition from the Stone Age to the Iron Age. A substantial number of stone tools types were not identified in the ancient remains, and a time gap was found with hundreds of years passing until the appearance of iron tools that would replace stone tools.

In this study, a review was performed on the development of stone tools in the Hoseo region in the culture of pottery with round clay stripes. As a result, the use of wooden tools and the production methods for stone tools were considered the factors that caused the unequal distribution of stone tools types.